資料館ノート　第 113 号　　平成 28 年 1 月 16 日発行

長屋と人々の暮らし⑤

深川の人びとの暮らし

江東区深川江戸資料館

深川地域における特色ある職業・芸能は、天正 18 年（1590）に小名木川が開削され、沿岸に海辺大工町ができたことに始まる地域の開発や、その発展の影響を受けて成立してきました。本号では、深川地域における人びとの生業を中心に、生活する上で重要であった水との関わりについて取り上げます。

1. 人びとの暮らし

(1) 裏長屋（裏店）

江戸の町の地借層（地主から土地を賃借し、自己の家屋を建て居住する人）と、店借層（家や屋敷を所持せず、他の人の所持する家や屋敷を賃借し居住する人）の増加は、18 世紀後半より顕著となります。こうした人びとの生業は、肴商や前栽商などの棒手振と呼ばれる小商人や、左官や提灯張り、髪結い等の小職人で、裏店等に住んでいたようです。

江戸の町のなかでも、四谷・本所・深川・中之郷辺りが店借の密集地で、総居住戸数に対する総店借戸数の割合は、深川地域では江戸市中で最も高い 82.5 パーセントを占めました。つまり、深川の住人の 8 割強が自分の家を持たない店借層であったといえます。右表は、松平定信の行った寛政改革の一環として行われた善行表彰者の記録をまとめた「孝義録」（享和元年・1801 刊）や、江戸市中の地誌をまとめた「御府内備考」（文政 12 年・1829）等から深川地域の記録を抜粋したものです。当該地域は、大名や旗本の屋敷地や寺社地としての性格を有する一方で、河川や海に近接していることも影響して、魚介類の棒手振と舟乗や小揚等、舟運に関連する生業が数多く存在していました。

(2) 人びとの暮らしとその特色

人びとの日々の暮らし向きの様子は、ごく普通のことにして記録に残ることが多くありません。そこで、地域的特徴に注意してみると、河川や掘割がめぐり、猟師町や木場（材木置場）もあったことから、船頭や江戸前の貝や魚を捕る漁師等が多く存在していたと思われます。また、隅田川に面して深川佐賀町を中心に倉庫街が広がり、荷物の運搬にあたる小揚等を生業とする人びとが多く住んでいたと考えられます。

また、当該地域に立地する木場は、各地から運ばれてくる材木を集め、製材し、さらに江戸市中や他の地域へと輸送することを主な機能としています。そのため、材木を売買する問屋・仲買の他にも、加工する木挽や、運搬をする川並・筏師といった職業がありました。一方で、常設展示室の舞台となっている深川佐賀町は、物資の集散地として蔵が建ち並び、陸揚げや陸出しなど荷物の運搬を人力で行う力仕事に従事する人びとがいました。このような職業のなかから余技が派生し、やがて芸能として育ったものが現在でも「木場の木遣」「木場の角乗」等として伝えられています。

名　前	年齢	表彰年次	階　層	住　所	生　業
加兵衛		1736	店借	深川森下町	塩売
半七		〃	店借	深川北松代町	鰻売
五郎八	27	1757	店借	深川中川町	小揚
忠太郎	54	1790	名主	深川中島町	名主
さよ	28	1791	店借	深川北川町	
堀清庵	53	〃	家持	深川富吉町	医者
勝三郎	59	〃	店借	深川北松代町	輿桶屋
彦八	30	1793	店借	深川蛤町	蜊蛤之類商
三之丞	24	〃	店借	深川橋富町	舟乗
久七	57	1796	自身番屋裏住	深川相川町	組合持火の見櫓番人
はつ	56	〃	店借	深川北松代町裏町	
文蔵	62	1797	店借	深川八名川町	芝居木戸番
与兵衛	99	〃	店借	深川三間町	桶職
熊次郎	13	1799	店借	深川海辺大工裏町	塗師文蔵伜
源七	21	1801	家持	深川猿江裏町	
亀太郎	13	1803	店借	深川永代寺門前東仲町	時の物商
喜三郎		1808	店借	深川元町代地	紺屋手間取稼
頼母	101	1810	家持	深川元町代地	
しち		1811	店借	深川富吉町	
善太郎	16	1813	店借	深川蛤町	日雇稼並小肴売幸八伜
弥五郎	16	1816	店借	深川東町	日雇稼・舟乗
次兵衛		1818	店借	深川下大島町	小名木川通舟渡守
弥吉	14	1828	店借	深川中島町	むき身商
喜左衛門		1843	家持	深川北川町	

池上彰彦「後期江戸下層町人の生活」（『江戸町人の研究』2）より抜粋

2. 江戸の水

(1) 上水の発達

天正 18 年、徳川家康の江戸入府当時の江戸の町は、葦が生い茂る湿地帯が広がり、江戸城のすぐ近くまで海岸線が走っていました。そのため、日比谷入江と呼ばれた海を埋め立て、のちの日本橋から新橋周辺を造成します。また、井戸を掘った際に出てくるのは塩水ばかりであり、住環境を整える上で、飲み水の確保が重要になりました。

清水晴風　編・画「世渡風俗図会」（国立国会図書館蔵）

そこで、幕府は小石川を水源とした小石川上水（のちの神田上水の原型）を完成させます。その後、寛永 6 年（1629）頃、井の頭池を源流とする神田上水がほぼ完成します。そして、江戸市街地の発達に合わせ、石樋や木樋といった水道管が上水につながれ、給水場所も拡張するようになりました。神田上水ではまかないきれない江戸城の西南の地域には、承応 2 年（1653）玉川上水が開削され始めます。その後、明暦 3 年（1657）の江戸大火を契機とした市街地拡大政策は、新たに亀有（本所）上水・青山上水・三田上水・千川上水の 4 つの上水増設を行いました。これにより、大都市江戸を支える六上水が完成しました。

(2) 江戸期の水売り

江戸時代の物売りで「水売り」や「水屋」と紹介されている水を商品として売る商売がありました。夏に冷水売りとして冷水に白玉と砂糖を入れて売る行商人として洒落本（しゃれぼん）や川柳でも取り上げられ、初夏の風物詩として多く記録にも残されています。同じ水売りでも、水道や井戸に遠い場所や、良質の井戸に恵まれていない所に、平時飲み水を売りに廻る行商人もいました。天候や遠近によって左右されるものの、1 荷（天秤棒の前後の 2 つの桶）4 文程度で売っていたといいます。

(3) 深川地域と水

海に近接し、埋立地域を背景としている深川地域では、井戸を掘っても塩分のある水が出て良質な水を求めにくく、生活をする上で「水」との関わりがとても重要でした。江戸市中では、神田上水を始めとする上水道が普及されていました。深川方面も「亀有（本所）上水」が開通していましたが、享保 7 年（1722）に廃止されています。その背景には維持が困難だったとか、将軍の側近であった室鳩巣の進言によるものであるなど諸説あるようです。また、四上水に代わるものとして、地下の深いところから真水を汲み取る掘抜井戸の技術が江戸で広まったのもこの頃です。

当該地域のような上水や井戸が遠い場所や、良質な水に恵まれていない場所には、水を舟に積んで売りにくる水舟や、先に述べた水売り（上図）がきて、人びとはそこから生活に必要な水を購入していました。この水は、神田・玉川の余剰水が利用されました。水売りを生業とする者たちは、呉服橋門内の銭瓶橋（ぜにかめばし）左右や、一石橋（いっこくばし）左右の余水の放流場所に船をつけ、この水を汲み、一荷いくらという値段をつけて、主に深川地域の人びとに売っていたのです。

一方で、深川佐賀町には、菓子の名店である船橋屋がありました。菓子屋は、良質な水を必要とする業種の一つです。船橋屋は練羊羹（ねりようかん）を売り物としており、1 日に 800 棹から 1,000 棹も販売していたといいます。その製造用水には大量の水を使用するため、掘抜井戸を使用していたと考えられます。しかし、掘抜井戸も掘るのは容易なことではなかったため、一町にどのくらい普及していたかは不明です。

以上のように深川は、町の開発から発展・成立までの地域的特徴から、特色ある職業や暮らし、文化が生まれ、その様子が現在まで窺い知ることができる地域といえるでしょう。

（主な参考文献）

池上彰彦「後期江戸下層町人の生活」（『江戸町人の研究』2、吉川弘文館、1973）
東京都公文書館編『東京の水売り』（都市紀要 31、東京都、1984）